

今年オリンピック・パラリンピックが開催され、気温も応援も熱い(暑い)夏でした。国籍や文化も越え、互いに競い合い、称え合うアスリートの姿に、子どもたちの未来を重ね、平和を祈る夏となりました。

幼児教育センターでは、研修会のアンケートを参考に今年の前期は希望の多かった「特別支援」や「絵本」の研修を行いました。今号はその研修をお伝えします。

## 第1回 幼稚園教諭・保育士合同研修会 (5月15日 カムカム新蒲田 121名参加)

テーマ 「特別支援教育」～インクルーシブな保育に向かうために～

共立女子大学 家政学部 児童学科 教授 広瀬 由紀(ひろせ ゆき)先生

### ☆ 統合保育とインクルーシブな保育 ☆

☆ 統合保育・・・「同じ」が考え方の基本。同じではないことへの違和感。同じに近づけるために試行錯誤する。

☆ インクルーシブな保育・・・「違う」が考え方の基本。「違う」からこそ知りたい。「違う」人たち同士が共にある姿そのもので参加できるように試行錯誤する。

#### ☆例、マジックを見る人の視線

それぞれの違いに対して



壁があって子どもは見えない。みんな同じは限界がある。

みんな同じ配慮や指導する



みんな同じ台に乗る。女性は見えるようになる。

一人一人に応じるために援助すること



一人一人に配慮する。全員見える。

ありのままのその子が参加できるようにすること



壁はアクリル板など見えるものにする。

※ありのままその子が参加できるように、前提そのものを見直す。

### ☆ インクルーシブな保育へ向かうために大切にしたい視点 ☆

- ・一人一人の子どもが自分の良さや可能性を認識する。大人はその子の姿を受け止める。行動として表れている姿は氷山の一角。「背景」に着目して支援を考える。また、人によって持っている感覚や表現が違うことを知る。
- ・対話しながらともに考える・・・評価のまなざし、共感のまなざし→子どもを見るまなざし。良い所、かわいらしさを見つめる。→その子への理解の輪が広がる。
- ・エラーから学ぶことは多い。→トライ&エラーから学ぶ・・・挑戦しよう、乗り越えようとする気持ち。エラーが許される場になる。「お互いさま」の関係性が大切。その子なりに、多様な子どもたちと共につながりあえる保育を模索していく。
- ・どの子にも分かりやすい環境づくり。言葉を「絵」にして伝える。「危ない」ではなく「止まって」などの具体的な言葉掛けをする。

### ☆ 共生社会を目指して ☆

☆誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様なあり方を相互に認めあえるよう全員参加型の社会を目指す。

○子ども同士が「関わる」→物や活動を介して関わりと関係性が築かれる→保育者などとの楽しい雰囲気誘われて関係性がつながる→つながるきっかけとしての遊びになる。

○個々の特性を意識し関わりを試行錯誤する。→相手の特性による難しさを考慮して関わろうとする。

○特別な配慮を要する子どもに対する周囲の幼児の認識が変わること→「自分と同じ」部分を感じる。



### ☆ 保育者の思いは周囲の子へつながる ☆

- ・どの子も肯定的に見ようとする保育者のまなざしを持つ。どの子も褒める。みんなで助け合えば大丈夫。
- ・その子の味方が増える→「これでも大丈夫？」と保育者が話し合い、つながることで子どもも成長していく。

### ☆ 研修生の感想 ☆

- ・インクルーシブな保育に向けて大切にしたい視点について、保育者が全て分かりきろうとするのではなくその子の姿を受け止めてみるということが大切であると学んだ。その中で、評価のまなざしと共感のまなざしを持つように日々の保育を振り返るきっかけとなった。